



なごや「聖歌」だより 11月号'09

「新聖堂」成聖式にむけて

新聖堂完成、成聖式が近づいてきました。建設は順調に進んで、聖堂脇で制作中のクーポルも、骨組みの上に銅板の貼り付けが行われています。今月半ばには十字架を取り付け塔の上に挙げられます。平行して、執事会や建設委員会を中心に成聖式に向けてのさまざまな準備も始まっています。聖歌の方も本格的な準備を始めたいと思います。

今月号と来月号はページを増やして成聖式と主教祈祷の流れと内容のあらましをご紹介します。「新しい聖堂の建立」に関わることができるというのは、クリスチャンとして希有なチャンスです。成聖式の祈祷文には「教会とは何か」「何のために聖堂を建てるのか」が宣言されています。

せっかくのチャンス、何が行われているかを知って十分に味わっていただきたいと思います。歌う者が内容を知るか知らないかによって、歌に大きな違いが出るのは言うまでもありません。



♪名古屋

「新聖堂」成聖式の

本格的な練習を始めます。

1月11日の成聖式まで残すところ2ヶ月を切りました。すでに「イスボラ」「成聖式のトロバリ」などの練習を始めていますが、今月から今回は奉仕の役割として『聖歌隊』を編成し、本格的な練習を始めます。

当日の聖体礼儀には名古屋教会だけでなく他教会からの方も聖歌に参加されると思います。そのためにも、核となる聖歌隊の充実が求められます。

聖歌隊にはどなたも参加いただけますが、練習への参加をお願いします。練習日は日曜日の祈祷後に加え、毎週(18日から)水曜日に行く予定です。練習するのは「成聖式」「主教祈祷」「成聖式晩禱」の聖歌です。12月に入ったら降誕祭の練習も合わせて行います。

聖歌練習



—11月の練習日程—

11月 8日(日) 代式後(11時頃)
11月 15日(日) 聖体礼儀後 少々
11月 18日(水) 午後1時から
11月 22日(日) 聖体礼儀後
11月 24日(火) 午前10時半から
11月 29日(日) 聖体礼儀後

♪半田： 11月11日(水) 11:45ごろ

降誕祭の聖歌を練習します。名古屋の聖歌に参加される方も多いので、4声の聖歌練習も行います。

また、名古屋の成聖式の聖歌に参加を希望される方は、名古屋での練習にご参加ください。

ズナメニイ研究会

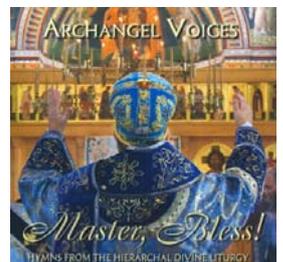
次回第6回 11月18日水曜日 11時～

11月の指揮当番

15日 エレナ広石 22日 ピーメン松島
25日 マリア松島

新着CD 紹介「主教祈祷」

3年前大阪教会で『祈りの音楽』の講演した聖歌研究者のモロザン氏が、自身のプロデュースのCDを「新聖堂献金」のために贈呈して下さいました。ケドロフの「天にいます」や「イスボラ」なども入っています。プロ級の聖歌者が集まって録音したもので、技術的にも大変すぐれています。2000円で頒布中



聖堂成聖式

その1 宝座の成聖

成聖式の祈祷文をもとに、成聖式の流れ、教会が成聖される意味を解説します。掲載写真は昨年9月にキリル府主教座下(現総主教)が東京の駐日ロシア教会アレクサンドル・ネフスキー聖堂で行なった成聖式の模様です。

聖堂成聖式は宝座の成聖と不朽体の嵌入という二つの儀式で構成されており、聖体礼儀に先立って主教が行います。主教の入堂、着装のあと、至聖所に入り宝座の成聖が始まります。宝座はパンとブドウ酒を献げる儀式を行う祭壇、聖堂の中心です。旧約時代から受け継がれた犠牲の儀式であり、ハリストスが使徒達に教え、教会が伝え続けてきた無血祭です。

宝座の成聖は至聖所で神品のみによって行われます。聖所では聖詠が歌われ、至聖所で行われる祈りを支えます。

主教が聖堂前に到着し、聖歌隊は聖堂の名前となる「神現のトロパリ」を歌って出迎えます。入堂式が行われ、中央のカフェドラ(主教の立つ台)の上で主教は祭服を着装します。このとき聖歌隊は「爾の霊は主を讃め揚げよ」を歌います。「トンデスポティン」が歌われ、主教の祝福の後、神品一同は至聖所に入り、王門が閉じられます。成聖にたずさわる神品はスラキツァとよばれるエプロンを着けて待機します。



至聖所

宝座の天板は外してあります。柱の上部にはあらかじめ釘をうちこむための穴があけられており、主教は融かしたミツロウ・パテを注ぎこみます。そこに聖水をかけ、「爾を讃揚するがために『聖なる神現』の名によりて造られしこの堂を成聖し、及びここに宝座を立てるに堪えるものとならしめ給え」と唱えます。

司祭は天板を運び、主教は両側から聖水をかけて、柱の上に据え付けます。

天板の四隅に石で釘を打ち込み、釘穴にミツロウを注ぎ、封印します。ミツロウが固まったら、司祭たちはあふれた分をナイフで掻き取ります。

主教はひざまずいて祝文を唱えます。神がモイセイに律法を与えたこと、ヴェツェレルを幕屋の職人に任じたこと(出エジプト記)、ソロモンの神殿など旧約の事柄が記憶され、使徒たちによって全世界に神の教会と祭壇が植え付けられ無血祭が行われること、今ここに「神現」と名づけられ、主の光栄のために建てられた新聖堂が神の住居となり、苦しむ者の港、欲望の癒し、弱き者の避難所、悪魔からの防ぎとなるように、またここで祈祷する者の祈りを聴き入れ、守ってくださるよう祈ります。ここで行われる聖務は、天の祭壇において行われる奉事で、我等の手による奉事ではないからだ、高らかに宣言されます。

聖所

144聖詠、22聖詠を唱える(歌う)

我が神、我が王よ、
我爾を尊み、爾の名
を世に崇め讃めん。
我日に爾を崇め讃め、
爾の名を世に讃め揚げん。
主は大にして讃めらるべし、
其威厳は測り難し…

主は私の牧者なり、
我萬事に乏しからざらん。
彼は我を茂き草場に休ませ、
我を静なる水に導く…

信徒もひざまずいて祈る。



天板に聖水をかけ、柱の上に置く



石で釘を天板に打ち込む



釘穴にミツロウを注ぐ

至 聖 所



宝座にお湯を注ぎ洗います。

神品たちが大連禱を唱えます。



続いてワインとバラ水をまぜたものを注ぎ、司祭等が手で天板にすり込み、そのあと、ハンカチ様の白布で磨きあげます。主教「イソップを以て我に注げ・・・」



天板の上3箇所と柱に聖膏（洗礼の時につけられる特別の油）で十字を描き、



白い下覆いをかぶせ、ヒモをかけます。ヒモは一筆書きで周囲四面に十字模様ができるようにしぼり、最後は封印します。



聖水で浄めた上覆いを着せて、十字架、福音書などを定位置に置きます。



続いて聖所全体の成聖を行います。

主教が炉儀しながら聖所を回り、司祭が棒の先につけた筆で聖膏で壁の各所に十字を描いてゆきます。



十字行の用意をします。本来は不朽体は近隣の教会に安置しておき、十字行を行って取りに行きます。現在では不朽体は前の晩から新聖堂のイコノスタスのハリストスの聖像前に安置します。主教はディスコスの上の不朽体を頭上にかかげ、凱旋旗、大ロウソクなどに先導され、聖堂の回りを1周します。

聖 所

83聖詠

萬軍の主よ、爾の住所は何ぞ愛すべき。我が靈は厚く慕ひて主の庭を望み、我が心我が身は生活の神に馳す・・・

50聖詠10-20

我に喜と樂とを聞かせ給へ、然せば爾に折られし骨は悦ばん。爾の顔を我が罪より避け、我が盡くの不法を抹し給へ

132聖詠

兄弟睦しく居るは、善なる哉、美なる哉。是れ寶なる膏が首にありて・・・

131聖詠

主よ、ダavidと其悉くの憂とを記憶せよ。彼主に誓ひ、イアコフの有能者に約して云へり、・・・

92聖詠

主は王たり、彼は威嚴を衣たり、主は能力を衣、又之を帯にせり、故に世界は堅固にして動かざらん

25聖詠

主よ、我を判き給へ、蓋我玷なくして行けり、我主を待みて揺かざらん・・・

聖歌の名称

聖歌の名称の大半はギリシア語起源です。ここでは日本語、原語のギリシア語の単数複数、教会スラブ語の単数複数を示します。

1. スティヒラ (讃頌)

τό στιχέρον, τά στιχηρά στιхира, стихирь

スティヒラはさまざまな内容や長さをもつ詩の節の集合体で、各節は通常8行から12行からなり、対応する旋律行数に合わせて作られています。各スティヒラは、聖詠(詩篇)の句の間に挿入され、聖詠の句とスティヒラが交互に歌われます。聖詠(詩篇)の句が先に唱えられ(歌われ)、それに続いてスティヒラ1節を歌います。例外的にスティヒラのあとに句がつくものもあります。2つの聖歌隊が立って交互に歌う場合は、一方の聖歌隊が専ら聖詠の句を歌い、もう一方がスティヒラを歌います。ティピコンの指示で、あるスティヒラを繰り返す場合は、反対側の聖歌隊が同じスティヒラを繰り返して歌います。

スティヒラではしばしば、カノナルフが立つことがあります。その場合はカノナルフが句の前半を歌い、続けて句の後半を聖歌隊が歌い、応答唱(レスポンソリアル)の形を取ります。スティヒラに先行する聖詠句は、教会スラブ語でザピエフ(запиев, 複数形 запиевы)と呼ばれます。途中でスティヒラの調(グラス)が変化する場合、カノナルフはザピエフの前に「〇〇調の調べ〜」と調の変化を知らせ、新しい調で歌い出し、続くスティヒラのイントネーション(抑揚)を提示します。

スティヒラは大きく7種類に分類することができます。晩課の「主や、爾に顛ぶ」のスティヒラ、挿句のスティヒラ、「凡そ呼吸ある者」(讃揚)のスティヒラ、リティヤのスティヒラ、真福詞のスティヒラ、単独で用いられるスティヒラ、福音スティヒラです。順に解説してゆきましょう。

注: カノナルフ、先唱者、9月号参照

(1) 「主や、爾に顛ぶ」のスティヒラ

στιχηρά εις τὸ Κύριε ἐκέραξα;
стихиры на господи воззвахъ

晩課の聖詠、第140、141、129、116聖詠(詩篇141、142、130、117)の中に織り込まれて歌われます。大き

な祭りの日で、ティピコンに「主や、爾に顛ぶ」に10スティヒラ(10句立てて)と指示されていれば、第141聖詠の第8句(「我が霊を獄より…」)のあとからスティヒラを1節ずつ挿入します。8スティヒラ(8句立てて)の場合は第129聖詠の第1句(主や、我深き處より爾によぶ。主や、我が声を聴き給へ)のあとから、6スティヒラの場合は第129聖詠の第3句(主や爾若し不法を糾さば、主よ孰か能く立たん…)のあとから始めます。

小晩課はいくつかの修道院でしか行われていませんが、4スティヒラのみで、この場合は第116聖詠の第5句(我が霊主を待つこと、番人の旦を待ち…)のあとから始めます。

(2) スティヒラ・アポスティカ: 挿句のスティヒラ
στιχηρά ἀπὸ στίχους, στιχηρα εις τα στίχους;
стихиры стиховны, стихиры на стиховнехъ

晩課の後半、聖入のあとに歌われ、通常は4スティヒラのみです。「主や、爾に顛ぶ」のスティヒラでは聖詠の句が先行し、続いてスティヒラが歌われますが、挿句のスティヒラではスティヒラが先に歌われ、続いて聖詠の句が歌われます。さらに「主や、爾に顛ぶ」のスティヒラの場合、付随して読まれる句は常に同じですが、挿句のスティヒラの句は週の曜日や祭日によって変わります。平日の早課でも挿句のスティヒラが行われますが、第89聖詠の第15句(主よ、夙に爾の憐を以て我等に飽かしめよ)から17句の間に挿入されます。

(3) 讃揚のスティヒラ: 讃揚歌

στιχηρά εις τοὺς Αἴνους;
стихиры на хвалителхъ

このスティヒラは日曜と祭日の早課にのみに歌われます。「凡そ呼吸ある者」(または「天より主を讃め揚げよ」)で始まる第148、149、150聖詠の讃揚の聖詠の最後に挿入されます。6スティヒラとあれば第149聖詠の9句め(「彼等の爲に記されし審判を行はん爲なり、斯の榮は其悉くの聖人に在り」)から、4スティヒラと指定されれば第150聖詠の第2句(「鼓と舞とを以て彼を讃め揚げよ、絃と簫とを以て彼を讃め揚げよ」)から始めます。

注: 八調経、連接歌集は上記のとおりだが、時課経は1句あとの「神を其の聖所に」からとなっている。日本の主日前晩祷では通常省略されて実施されていない。

Johan von Gardner, *Russian Church Singing*, SVS

ホームページのご案内

○ 「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料